書物としての『種の起源』

松　永　俊　男

1. はじめに

ダーウィン（Charles Darwin）の『種の起源』（*Origin of Species*）は近代進化論を確立した著書として，さまざまな観点から研究が進められている[1)]。本稿はその書物としての側面に注目し，初版（1859）から第6版（1872）に至るまでの変化を追ったものである[2)]。

書物としての『種の起源』の基本的資料はペッカム（Morse Peckham）による集注版（1959）にまとめられており，現在でも不可欠な参照文献となっている[3)]。

フリーマン（Richard Broke Freeman）によるダーウィン書誌（1977）はペッカムの成果を踏まえ，さらに版次による違いについてより詳細な資料を提供している[4)]。

ダーウィン関連の書簡を網羅した『チャールズ・ダーウィン書簡集』の刊行が1985年から始まった[5)]。ここに収録された書簡をたどることによって各版の出版事情がより詳細に分かるようになった。この書簡集の活用が，先の二著になかった本稿の特色である。

ダーウィンが主要な行動を記し続けた「日誌」（Journal）については，書簡集に順次，掲載されたものを利用した。

キーワード：ダーウィン，『種の起源』

本稿の構成について述べておくと，次の第２章では出版者や印刷所など，直接，『種の起源』の出版に関わった人々についてまとめた。第３章では版次による『種の起源』の形態の変化を追った。本稿の中心となる第４章では，『種の起源』諸版の執筆と刊行の事情を書簡集をたどることによって明らかにした。

本稿ではダーウィン生前にイギリスで刊行された『種の起源』諸版についてのみ，考察している。ダーウィンはアメリカ版や仏訳，独訳などについても深く関与していたが，これについては別の機会にゆずりたい。ダーウィン没後から現在に至るまでの『種の起源』出版事情については，古書販売業者による論考が詳しい[6)]。

2.『種の起源』の出版者と印刷者

1）出版者ジョン・マレー

『種の起源』を出版したジョン・マレー（John Murray Ⅲ, 1808-1892）はマレー出版社の３代目である。創業者のジョン・マレー（John Murray Ⅰ, 1745-1793）はエジンバラ出身の海軍士官だったが，1768 年に退役し，印刷出版業者が集まるロンドンのフリート街で開業した。同社を著名な出版社に育てたのは初代の息子の２代目ジョン・マレー（John Murray Ⅱ, 1778-1843）である。1812 年にアルベマール街に移り，この年からバイロン（George Gordon Byron）の作品を出版するようになった。ライエル（Charles Lyell）との関係は『地質学原理』（*Principles of Geology*, 1830-1833）を出版したことから始まり，３代目にも引き継がれた。マレー社は２代目の長男の３代目によってさらに発展し，アルベマール街の社屋は文化人の溜まり場として有名になった[7)]。

ダーウィンとマレーとの関係は，『ビーグル号航海記』（1839）の版権をコルバーン（Henry Colburn）からマレー社が 1845 年に買い取り，第２

版を刊行した時から始まった。しかしその後，両者は疎遠になったため，『種の起源』出版に際してダーウィンはマレーと親密なライエルに仲介を依頼した（1859 年 3 月 28 日付ライエル宛の書簡，CCD7, 269-271）。『種の起源』をきっかけにダーウィンとマレーとの関係は深まり，その後のダーウィンの著書はほとんどすべて，マレー社から出版された。

なお，マレー社は 2002 年，7 代目ジョン・マレーの時代にイギリスの出版社ホッダー・ヘッドライン（Hodder Headline）に買収され，マレー家による経営が終了した。ホッダー・ヘッドラインは 2004 年にフランスの出版社アシェット（Hachette）の傘下に入っている[8)]。

2006 年，マレー家が所有していた創業以来の資料をスコットランド国立図書館が購入し，「ジョン・マレー文書」（John Murray Archive）として保存している。『種の起源』関連の資料も含まれている[9)]。

2）印刷者ウィリアム・クロウズ

マレーが刊行したダーウィンの著書はすべてクロウズ社（W. Clowes & Sons）が印刷していた。創業者の初代ウィリアム・クロウズ（William Clowes Ⅰ, 1779-1847）は 1803 年にロンドンで開業し，速さと正確さで評判を取り，事業を拡大していった。1823 年に印刷業として初めて蒸気機関を取り入れ，高速で廉価な印刷を可能にした。1823 年から経営に参加した 2 代目ウィリアム・クロウズ（William Clowes Ⅱ, 1807-1883）によって同社は大きく発展し，世界有数の印刷会社となった[10)]。

現在のクロウズ社（William Clowes Ltd.）はサフォーク州ベックレス（Beccles）にあり，クロウズ家の経営が続いている[11)]。

3）貸本業者ミューディ

『種の起源』初版 1,250 部のうち，500 部は貸本業者のミューディ（Charles

Edward Mudie, 1818–1890）が購入した。ロンドンで父親の古書・新聞販売店を手伝っていたミューディは1840年に独立し，1842年に貸本業を開始した。他の貸本業者では1度に1冊を借りる年会費が4から10ギニーだったが，ミューディは1ギニーとした。ミューディの事業は急速に拡大してイギリスで最大の貸本業者となり，半世紀にわたって出版界と読書界に絶大な影響力を及ぼし続けた[12)]。

貸本業の主力は小説であった。当時の小説がほとんど3巻本（three-decker）として刊行されていたのは，ミューディら貸本業者たちの意向によるものであった。ミューディは小説の内容について厳しい選定基準を設けており，中流階級の家庭にふさわしいと認めたものでなければ扱わなかった。他の貸本業者もミューディにならったため，出版社はこの基準を尊重せざるを得なかった。これはヴィクトリア朝の道徳観に大きな影響を及ぼした[13)]。

ミューディが貸本業を始めた最初の目的は，ノンフィクション本を広めることであった。この線に沿ったものとして，たとえばリヴィングストン『アフリカ探検記』（1857）を3,520部，購入している。500部購入の『種の起源』初版は，会員によって2,000回は読まれたと推定される[14)]。その後もライエル『ヒトの古さ』(1863) を数千部購入，ハクスリー『ヒトの位置』（1863）を数百部購入するなど，ミューディは科学書の普及にも貢献していた[15)]。

ダーウィンはミューディに5ギニーの年会費を払い，ミューディからは毎月，ノンフィクションと小説を合わせて6冊の新刊書が送られてきた。ダーウィンはミューディの小説選定基準に疑問を抱かなかった。ダーウィンの好みはありふれた内容の長編小説で，それを妻エマに読んでもらうことを楽しみにしていた。科学には厳しいダーウィンが小説については家族があきれるほど無批判であった[16)]。

なお，ミューディ没後，その事業は息子たちに引き継がれたが，公共図書館の充実などによって衰退し，1937 年に廃業している。

3.『種の起源』の形態

1）初版の形態

1859 年 11 月 24 日，『種の起源』初版が刊行された（店頭に並んだ）。十二折本（duodecimo）だが，1 シート半のポスト原紙を用いているので，大きさは通常の八折本（post octavo）と同じく 200mm × 125mm であり，おおむね現行の A5 版に相当する[17]。当時の書物の常として，読者がページを切り開くアンカット本である。前付 10 ページの後の本文 490 ページと索引 12 ページには通しのページ番号（[1]-502）が付けられている。索引の後に 32 ページのマレー社出版目録（Mr. Murray's General List of Works）があり，独立のページ番号が付けられている。目録の日付は「1859 年 6 月」となっている。本書の唯一の図版である分岐図が p. 116 と p. 117 の間に折り込まれている。

折丁（gathering）はアルファベット順（J と W はない）に番号付けされている。現在の出版物では通常，読者が折記号（signature）を目にすることはないが，本書では各折丁の 1 ページ目，3 ページ目，それと 9 ページ目の右下に折記号が印刷されている。たとえば p. 1 には B，p. 3 には B2，p. 9 には B3 とあり，p. 489 には Y3 とある。

紙はクリーム色で本文は 35 行，10 ポイントの活字で印刷され，読みやすい。ブラウンは「19 世紀の印刷物のよい見本である」と述べている[18]。

表紙は緑色の布製。背表紙に略書名（ON THE ORIGIN OF SPECIES）と著者の姓（DARWIN）が金文字で記されている。当時の書物の常として，表面には書名も著者名も無い。

発行部数は 1,250 部で，価格は 14 シリングというかなりの高額書である。

ちなみに巻末出版目録によれば，一般向きに書かれた『ビーグル号航海記』第 2 版（1845）は当時, 8 シリング 6 ペンスであった。なお, ペッカムは『種の起源』初版の価格を 15 シリングとしている（Peckham, 17）。その後のダーウィン文献はほとんどこの価格を受け継いでいるが，初版が 14 シリングであったことは間違いない[19)]。

2）第 5 版までの変遷

『種の起源』第 4 版（1866）までは内容増加によるページ数の増大はあっても，その形態は基本的に初版を受け継いでおり，価格も 14 シリングのままであった。

とくに第 2 版（1860）は初版への注文が発行部数を上回ったため，急遽，制作されたものであり，本体に「第 2 版」の表示はない。ページ数は初版と同じだが，前付と本文に若干の修正がなされている。初版と同じく巻末に 32 ページの出版目録が掲載されているが, 日付は「1860 年 1 月」となっている。この目録には『種の起源』初版も掲載されており, 書名の後に “Post 8vo. 14s.” と記されている。

なお，第 2 版の版下については，従来，初版の版下を修正して流用したとされてきたが，近年，第 2 版を含め，第 5 版までの版下はすべて新たに組まれたものであることが明らかにされている[20)]。

第 3 版（1861）では「目次」（pp. v-ix）の後に 2 ページの「加筆と訂正」（Additions and Corrections. pp. xi-xii）と 8 ページの「種の起源に関する意見の進歩の歴史的概要」（An Historical Sketch of the Recent Progress of Opinion on the Origin of Species. pp. xiii-xx）が付加され，この形がその後の版にも踏襲された。「加筆と訂正」は直前の版との主要な異同を一覧表にまとめたものである。「歴史的概要」は先行研究を無視しているという初版に対する批判に応えたものである。第 3 版の本文は 35 ページ増

えて 525 ページとなり，索引（pp. 527–538）は初版と同じ 12 ページである。フリーマン（p. 79）によれば，索引の後に，索引と同じ折丁に印刷された 2 ページの出版目録が付記されているはずだが，*DarwinOnline* では確認できない。

第 4 版（1866）は第 3 版の形を踏襲している。前付の後に，目次（pp. v-ix），「加筆と訂正」（pp. xi-xii），「歴史的概要」（pp. xiii-xxi）が続く。本文は第 3 版より 52 ページ増大して 577 ページとなり，15 ページの索引（pp. 579–593）が続く。索引の後に初版と同様に 32 ページの出版目録が付記されている。目録の日付は 1865 年 1 月である。この目録にはダーウィンの著作が 3 点，掲載されている。すなわち，『ビーグル号航海記』（9 シリング），『種の起源』（14 シリング），『ランの受精』（9 シリング）の 3 点である。

第 5 版（1869）は八折本（crown octavo, 190mm × 125mm）になり，価格は 15 シリングになった。ページ下部のマージンが狭くなったほかは，第 4 版までと同じ形を踏襲している。前付の後に，目次（pp. v-x），「加筆と訂正」（pp. xi-xiii），「歴史的概要」（pp. xv-xxiii）が続く。本文は大きく修正されたが，削除された部分も多く，第 4 版より 2 ページ増の 579 ページとなり，16 ページの索引（pp. 581–596）が続く。フリーマン（p. 79）によれば，通常は索引の後に，1868 年 9 月付の出版目録が付記されているというが，*DarwinOnline* では確認できない。

3）廉価版の第 6 版

書物としての『種の起源』は第 6 版（1872）でその特徴を一変させた。第 5 版よりも小ぶりの八折本（187mm × 118mm）で，ページは切り離されている。第 5 版までと決定的に異なるのは本文の活字が 8 ポイントと小さくなり，1 ページ 43 行になったことである。その結果，総ページ数が抑えられ，価格は第 5 版の半額，7 シリング 6 ペンスになった。印刷方式も第

5版までの活版とは異なって鉛版印刷となり，増刷が容易になった。そのためもあって，第5版までは増刷がなかったが，第6版は繰り返し増刷された。

前付の後に，目次（pp. v-ix），「加筆と訂正」（pp. xi-xii），「歴史的概要」（pp. xiii-xxi）が続く。429ページの本文の後に新たに作成された「用語解説」（pp. 430–442）があり，その後に16ページの索引（pp. 443–458）がある。「用語解説」（Glossary of the principal scientific terms used in the present volume）は本文中の専門用語をアルファベット順に配列し，簡単な解説を付記したもので，作成したのは動物学者のダラス（William Sweetland Dallas）である。

マレー社が読みやすさを犠牲にしてまで廉価版を刊行したのは，教育の普及によって生まれた新たな読者層を意識したからであった。この方針は成功し，売れ行きは好調で，第6版は繰り返し増刷された。1876年印刷版には本文にわずかな修正がなされ，これが同書の最終テキストとなった。この形の第6版が1890年まで，毎年のように繰り返し増刷された。しかしこの読みづらい第6版は，購入はされたものの実際には読まれなかった可能性が高い（Peckham, 24）。

1901年に初版の著作権が切れ，その後，順次，第2版以降の著作権も切れていった。それに応じて『種の起源』は出版各社からさまざまな形で刊行されるようになった[21)]。

4.『種の起源』諸版の執筆事情

1）初版の執筆事情

『種の起源』初版の出版事情はよく知られており，拙著『チャールズ・ダーウィンの生涯』（pp. 218–222）でも解説している。ここではその概略を短くまとめておくだけにしたい。

1856年5月14日，ダーウィンは種の問題を論じる大著の執筆に着手した。

その作業が半ば以上進行した1858年6月18日にウォレス（Alfred Russel Wallace）のいわゆる「テルナテ論文」を受け取った。ライエルとフッカー（Joseph Dalton Hooker）の尽力により，ダーウィンの未公表の進化理論概略とウォレスの「テルナテ論文」とが，7月1日のリンネ学会の会合で発表され，8月20日発行のリンネ学会動物学部門の紀要に掲載された。

この事件をきっかけにダーウィンは急いで大著の抄録を執筆することになった。「日誌」（CCD7, 503-4）によれば，1858年7月20日に執筆に着手し，翌1859年3月19日に執筆を終えた。前述したように同月28日付ライエル宛の書簡で抄録出版についてマレーへの仲介を依頼し，タイトルページの案も同封した。そこには下記の書名原案が記されていた[22)]。An Abstract of an Essay on the Origin of Species and Varieties through Natural Selection

ダーウィンの書名案に対してマレーは“abstract”と“natural selection”とを削除するよう要請した。ダーウィンは“abstract”の削除には同意したが，“natural selection”にはなじみがないというマレーの意見には同意せず，“natural selection”の後に“or the preservation of favoured races”という言い換え語を加えることにした。最終的には“varieties”が削除され，末尾に“in the struggle for life”が加えられて，初版の扉に記載の正書名は下記のようになった。

On the Origin of Species by Means of Natural Selection or the Preservation of Favoured Races in the Struggle for Life

ダーウィンは悪筆だったため，手紙文の多くは妻エマによって代筆され，著書の原稿は学校教師らの協力者によって清書されたものがマレーに送られていた。『種の起源』の原稿も複数の協力者によって清書された（1859年4月2日付マレー宛書簡，CCD7, 277）。

「日誌」（CCD7, 504）によれば，『種の起源』の原稿の最初の6章が5月

10 日にマレーに送られた。ダーウィンによる校正は 5 月 25 日に始まり，10 月 1 日に終了した。『種の起源』第 3 版（1861）までの前扉には初版の発行日が “October 1st, 1859.” と記されているが，明らかに事実と異なっている。

11 月 3 日，完成した『種の起源』の見本がダーウィンに届いた（1859 年 11 月 3 日付マレー宛書簡，CCD7, 365）。ダーウィンは著者負担による 90 名の献本先の名簿をマレーに送っていたが, この献本先へも出版前に『種の起源』が送付され，献本先からは礼状や読後評がつぎつぎとダーウィンに届いていた。

11 月 22 日にマレー社の書店向け販売会が開催され，発行部数 1,250 部の『種の起源』に対し 1,500 部の注文があった。最大の注文は貸本業者ミューディによる 500 部であった。

ダーウィンの「日誌」の 1859 年の欄（CCD7, 504）に，“The 1st. Edit was published on Novr. 24th & all copies ie 1250 sold first day.” と記されており, これを根拠に,『種の起源』初版は発売初日の 11 月 24 日に完売した，としている文献も多い。しかし，11 月 24 日はマレーの書簡がダーウィンに届いた日であり，完売したのはマレー社の在庫であった。当時，書店での売れ行きを知るよしはなかった。

『種の起源』第 4 版以降の前扉には，“November 24th, 1859.（1st Edition.）” と記されている。フリーマン（p. 75）によれば，『種の起源』が書店の店頭に並んだ 11 月 24 日を発行日とみなしたものである。

なお，『種の起源』の注文部数 1,500 部は 11 月 22 日のマレー社販売会では 5 番目の売り上げであり, 2 番目にはスマイルズ（Samuel Smiles）の『自助論』（*Self-Help*9）の 3,200 部があった[23)]。

2）第 2 版の執筆事情

1859 年 11 月 24 日，保養地イルクリーに滞在していたダーウィンに，マレーから 22 日の販売会の結果を知らせる書簡が届いた[24)]。そこには初版の不足を補うため，単なる増刷ではなく，至急，修正版を出したいので，直ちに作業に取りかかってほしいとあった。ダーウィンは当日の返信（CCD7, 395）で，直ちに修正作業に取りかかるので，初版をシートの形で送るよう，マレーに要望した。

12 月 2 日付マレー宛ダーウィンの書簡（CCD7, 410）には，修正したシートをすべてクロウズに送ったので，今後の時間は印刷所だけの問題であると述べ，索引を作り直す余裕はないので，ページ番号は初版と同じままにしてほしいと要望している。さらに，『種の起源』はこの形のままにして大著に専念したいと述べている。追伸では第 2 版への「まえがき」が提案されている。そこには，「この第 2 版は初版の再版にすぎないが，若干の語句修正と削除を施している」とあり，加筆箇所として，第 9 章の鳥類化石の記述（p. 304），第 13 章の「発生期の器官」（nascent organ）についての記述（p. 452），および第 14 章のキングズリー（Charles Kingsley）の手紙文からの抜粋（p. 481）の 3 件を挙げている。しかし，この第 2 版「まえがき」は実現しなかった。

12 月 26 日付マレー宛ダーウィンの書簡（CCD7, 455）には，最後の校正刷りを返送したので，残るは印刷と製本だけであると述べている。

かくして 1860 年 1 月 7 日に『種の起源』第 2 版 3,000 部が刊行された。ただしタイトルページにも「第 2 版」の表示はない。累積発行部数は 4,250 となり，タイトルページには “FIFTH THOUSAND” と記されている。

初版との内容上の違いで目立つのは，第 2 版でキリスト教への言及が増加したことである。初版の前扉には自然神学の立場を示すヒューエル（William Whewell）とベーコン（Francis Bacon）の言葉が引用されていたが，

第２版ではさらにバトラー（Joseph Butler）の言葉が追加された。本文ではキングズリーの手紙文のほか，最初の生物の出現に関して「創造者によって」が加筆され，“breathed by the Creator”となった（pp. 484 & 490）。これはダーウィンが本音を隠して教会への妥協を図ったものとみなされることが多いが，はたしてそうだろうか。筆者は，自然神学書としての『種の起源』の建前を改めて強調したものと理解している[25)]。

第２版での削除で注目すべきなのは，第３章から削除された「くさびの比喩」（the wedging metaphor, p. 67）と第６章から削除された「クジラ・クマ物語」（the whale-bear story, p. 184）である[26)]。いずれもダーウィンが考えていた自然選択説を考察する手掛かりになるものだが，ここでは問題を指摘するに止めておきたい[27)]。

3）第３版の執筆事情

1861 年のダーウィンの「日誌」には次のように記されている。「昨年 12 月と本年１月，オリジン第３版の準備をした」（CCD9, 390）。「4 月にオリジン新版 2000 部が刊行された」（CCD9, 391）。

第３版に向けた動きは 1860 年 10 月から始まっていた。ダーウィンは同月 12 日付マレー宛の書簡（CCD8, 421）で，「ライエルからオリジンの売れ行きが良好と聞いた。新版を出すなら多くの修正と歴史的概要を加えたい」と述べている。第２版の時と違ってダーウィンが修正に積極的になっていることが分かる。

同年 11 月 22 日に届いたマレーからの書簡には，販売会で『種の起源』第２版に 700 部の注文があったが在庫はその半分しかないので，直ちに新版の作成に取り組みたいとあった[28)]。折り返しダーウィンがマレーに送った書簡（CCD8, 488）には，修正用の第２版を送ってほしいとあり，修正に着手するのは10日か2週間後になると述べている。これは当時，ダーウィ

ンがモウセンゴケの研究に熱中しており，それに関する論考の執筆を優先したためであった[29)]。

12月3日付マレー宛ダーウィンの書簡（CCD8, 507）では，古い校正用シートが見つかったので，それによって作業を進めるという。

翌1861年2月24日付マレー宛ダーウィンの書簡（CCD9, 36）には，最後の校正シートを送ったと記され，表題の「第3版」の後に必ず「加筆と訂正を伴う」（with Additions & corrections）を付記するよう念を押している。

かくして1861年4月に第3版2,000部が出版された。累積部数は6,250部となり，タイトルページには“Seventh Thousand”と記されている。

第3版には新たに「改訂一覧」と「歴史的概要」が加えられた。「改訂一覧」（pp. xi-xii）には35項目の改訂箇所が表示されているが，そのうち3項目は上述した第2版における追加項目である。第3版で削除された内容で注目すべきは，第9章から削除されたウィールド（Weald）の削剥時間の推定（2nd ed., pp. 285-287）である。後にダーウィンはこの推定について，「我ながらまったく馬鹿げた話であった」と述べている[30)]。

初版の第4章では，小見出し「形質の分岐」（Divergence of Character）の節の後に「この章の要約」（Summary of Chapter）が続くが，第3版では「要約」の前に，小見出し「体制の進歩」（On the degree to which Organisation tends to advance）の節（pp. 133-143）が追加された。

4）第4版の執筆事情

1866年2月22日にダーウィンに届いた21日付のマレーからの書簡（CCD14, 75）には，第3版が売り切れたので新版を出したいが，修正が必要かとあった。当日の返信（CCD14, 76）でダーウィンは，自然史の進歩は著しいので多くの修正が必要であると述べ，『変異』の執筆を中断して

取り組むので修正用のシートを送ってほしいと告げた。マレーは24日付ダーウィン宛の書簡（CCD14, 78）で，修正用シートを別便で送ったと述べている。ダーウィンは1866年の「日誌」の3月1日の欄に，「オリジン第4版に着手」とあり，5月10日の欄には「オリジンを終えた」（CCD14, 481）とある。

ダーウィンは7月15日付マレー宛書簡（CCD14, 240）で，校正を終えたのでオリジン新版は直ちに製本できるだろうと告げた。ところがマレーは18日付の返信（CCD14, 248）で，読書シーズンが終わったので出版は11月の始めにしたいという。その通り，第4版1,500 部は11月前半に出版された[31)]。累積部数は7,750部となり，タイトルページには“Eighth Thousand”と記されている。なお，第4版のタイトルページには発行が「1866年6月」と記されているが，事実と異なる記載である。

「改訂一覧」には34項目の改訂箇所が表示されている。形式上の違いとしては，各節の小見出しの位置が変更された。第3版まではイタリックの小見出しが各節の最初の行頭に置かれていたが，第4版以降は独立した行の中央に置かれるようになった。

第3版で追加された第4章の小見出し「体制の進歩」の節の後に，さらに新たな小見出し「異論の考察」（Various Objections considered）の節（pp. 146-153）が追加されている。この節が第6版では追加された第7章の冒頭に移されるのである。

ダーウィンはサクラソウの多型などの研究から稔・不稔についての考察を深め，第8章「雑種」に加筆した。ただしそれによって第8章の主張が変化したわけではない。同章の趣旨は一貫して，不稔性が個別（special）にもたらされた形質ではなく，生殖器の違いなどから付随的（incidental）に生じたものであり，自然選択は不稔性に関わっていないということであった。

第 9 章（p. 367）で加筆された始祖鳥（Archeopteryx）の発見は，この後，生物進化の証拠として重視されるようになった。

第 3 版では第 11 章の最後の節となっていた「氷河期における分散」（Dispersal during the Glacial Period）の後半が第 4 版では独立した節（pp. 442–456）となり，小見出し「世界的氷河期」（Mundane Glacial Period）が立てられている。

5）第 5 版の執筆事情

ダーウィンは 1868 年 11 月 26 日付フッカー宛の書簡（CCD16, 862）で，「マレーの先日の販売会では『オリジン』に在庫を数百部超える注文があったので，直ちに新版を準備しなければなりません」と述べている。ダーウィンは当時，『人間の由来』の執筆に打ち込んでいたが，これを中断しなければならなかった。ダーウィンの「日誌」によれば，同年 12 月 26 日に『オリジン』の改訂作業を開始し，翌年の 2 月 10 日に作業を終えている（CCD16, 974; CCD17, 578）。

マレー社のクック（Robert Francis Cooke）からの 6 月 22 日付ダーウィン宛書簡（CCD17, 279）には，「『オリジン』新版は今週中に発行します」とあるので，『種の起源』第 5 版は 1869 年 6 月に刊行されたと見て間違いないだろう。第 5 版の前扉には発行が「1869 年 5 月」と記されているが，事実と異なる記載である。発行部数は 2,000 部で，累積部数は 9,750 部となり，タイトルページには “Tenth Thousand” と記されている。

「改訂一覧」（pp. xiii）には 29 項目の改訂箇所が表示されている。第 5 版における改訂としてよく知られているのは，「自然選択」の同義語としてスペンサーの用語「適者生存」（the survival of the fittest）を導入したことであろう[32]。ところがこれは，改訂一覧に記載されていない。

これとは逆に，現在のダーウィン論ではほとんど言及されないが，ダー

ウィン本人が第5版の重要な加筆とみなしていたのが，第11章の氷河期に関する記述である。ダーウィンはクロル（James Croll）による南北半球氷河期交代説（1868）が第4版の第11章で自ら認めた難点を克服するとみなした。第4版で追加した小見出し「世界的氷河期」は「南北半球の氷河期交代」(Alternate Glacial Periods of the North and South)に変更され，クロル説を詳しく論じている。

ダーウィンはドイツのドゥブ（Julius Dub）に宛てた1869年3月20日付の書簡（CCD17, 140）で，『種の起源』第5版の重要な加筆として氷河期問題のほかに，ネーゲリ（Karl Wilhelm von Nägeli）とワグナー（Moritz Wagner）の見解についての記述を挙げている。ワグナー（1868）が地理的隔離による種分化の重要性を説いたのに対し，ダーウィンは第4章（p. 120）で，隔離された小集団では自然選択が働きにくいとして，これを退けている。ネーゲリ（1865）の内在要因による進化説に対しては，第4章の小見出し「異論の考察」の節で，7ページ（pp. 151–7）にわたって反論している。

クロル，ネーゲリ，およびワグナーの名は第5版の「改訂一覧」に記載されているが，現在のダーウィン論でより重視されるのは，「改訂一覧」に名が記載されていないジェンキン（Henry Charles Fleeming Jenkin）とトムソン（William Thomson, Lord Kelvin）による批判である。本文の第9章の加筆部分（pp. 352–4 & 379）ではトムソンの名を明示して地球の年齢について論じている。ジェンキンの指摘した融合遺伝の問題点について論じた箇所（p. 104）では，ジェンキンの名はなく，匿名論文の掲載誌（*North British Review*, 1867）が記載されているだけである。ダーウィンは著者がジェンキンであることを知っていたが，匿名の建前を尊重したのであろう。

ネーゲリ，トムソン，およびジェンキンの批判を受けてダーウィンの変

異論は『種の起源』第5版で大きく変質するが，それについては後日，改めて論じたい。

6）第6版の執筆事情

第6版（1872）の形態は第5版（1869）までとは大きく異なっていた。内容面ではマイヴァートの批判に反論するために新たな章が第7章として追加された[33)]。その関連もあって，自然選択以外の進化要因が第5版以上に重視されるようになった。

このことを念頭に置いてダーウィンの書簡から執筆経過を追ってみよう。1871年4月22日付クック宛の書簡（CCD19, 320-1）でダーウィンは，新たな廉価版のページ見本を受け取ったと告げ，多くの読者を得るには価格が重要であると述べている。おそらくこの日までにマレーとダーウィンとの間で，第6版を廉価版として出版することが決まっていたのであろう。この後もダーウィンは第6版の価格に強い関心を示していく。5月31日付マレーからの書簡（CCD19, 405）には価格が7シリング6ペンスになるとあった。ダーウィンはこの価格に不満であった。6月3日付の返信（CCD19, 420）で，挿図のない本なので6シリングでも高いといい，さらに1月8日付マレー宛の書簡（CCD20, 15）で，廉価版としては6シリングでも高すぎるので，5シリングにしたらどうかと提案している。

前述の6月3日付書簡の最後でダーウィンはマレーに，『種の起源』第5版のシートを修正用に送るよう依頼している。「日誌」（CCD19, 786）によれば，ダーウィンは6月18日に第6版の執筆に着手し，10月29日に終えている。当時，ダーウィンは『感情の表現』の執筆に取りかかっていたが，これを中断しての作業であった。

10月6日付マレー宛の書簡（CCD19, 617-8）でダーウィンは，最初の6章の修正を終えたので印刷所に送ることができるし，新たに追加する第7

章の原稿を清書者に送ったと述べ，残りの章についても作業を進めたいという。さらに，読者からの要望もあるので新版には用語解説を加えたいと提案し，その作成をダラスに依頼したいという。

10 月 9 日付クックからの返信（CCD19, 623）には，ダラスによる用語解説は 10 ページ以内で時間を要せず，10 ポンドの謝礼でよければ追加したいというマレーの意向が伝えられている。

10 月 13 日付クック宛の書簡（CCD19, 634-5）でダーウィンは，ダラスがマレーの条件を了承したと述べ，最初の 6 章分をクロウズに送ったと告げている。

10 月 29 日に第 6 版のための修正作業を終えたダーウィンは，翌 30 日付クック宛の書簡（CCD19, 653-4）で，クロウズから校正刷りがまったく届いていないと苦情を述べている。また，この書簡の追伸でダーウィンは，第 6 版の印刷方式が鉛版になることに反対意見を述べている。この日以前にダーウィンはマレーの方針を聞いていたのであろう。ダーウィンが鉛版印刷に反対する理由は，修正が困難になるということだった。

11 月 1 日付クックからの返信（CCD19, 663-4）には，校正刷りの遅れに驚き，クロウズに督促したとある。鉛版印刷については，修正は可能なので，是非とも了承してほしいという。ダーウィンは 11 月 4 日付クック宛返信（CCD19, 669-70）で鉛版印刷になることを了承している。

残された書簡では確認できないが，11 月中にダーウィンはすべての原稿を印刷所に送り，印刷所からは順次，校正刷りが届けられるようになったと思われる。今回，校正作業は長男のウィリアム（William Erasmus Darwin）が担っていた。1872 年 1 月 9 日付ウィリアム宛の書簡（CCD20, 16）でダーウィンは，本文の校正を終えたことに感謝の辞を述べ，「まえがき」や索引の校正は頼まないと述べている。1 月 27 日付マレー宛の書簡（CCD20, 51）でダーウィンは，この日に索引の最終ページまでの校正を終えたと告

げている。ダーウィンの「日誌」には，1872 年 1 月 10 日の欄に，「『オリジン』の校正を終了，『表情』の執筆を再開」（CCD20, 650）と記されているが，これはウィリアムによる本文校正が終わった日付であった。

この 1 月 27 日付マレー宛の書簡でダーウィンは，価格を再考するよう依頼し，ページがカットされることを強く要求している。

2 月 12 日付クックからの書簡（CCD20, 69–70）には，『オリジン』新版の最初の 1 冊をダーウィンに郵送したとあり，販売価格は 7 シリング 6 ペンスにしたいと述べている。

かくして 1872 年 2 月に廉価版の『種の起源』第 6 版 3,000 部が刊行された。前扉には発行が 1872 年 1 月と記されているが，正確ではない。累積部数は 12,750 部となった。同じ第 6 版にもタイトルページの累積部数が，“Eleventh Thousand” とあるもの，“Twelfth Thousand” とあるもの，および “Thirteenth Thousand” と記されたものの 3 通りがあるという（Freeman, 86）。タイトルページの正書名は，第 5 版まであった冒頭の“ON”が削除されたものになった。

「改訂一覧」（p. xii）に表示されている改訂箇所は 30 項目である。新たに追加された第 7 章（pp. 168–204）についての説明には 11 行を費やしている。この説明文にもあるように，新たな第 7 章の最初の部分は，第 5 版第 4 章の最終節「異論の考察」を改訂したものである。後の主要部は新たに執筆したマイヴァートの批判への反論である[34)]。

「改訂一覧」で注目すべき項目の一つが，最終章で自然選択以外の進化要因を改めて強調したことである。用・不用の遺伝的効果，外部条件の直接作用，および突発的な変異について，「今まで，こうした要因の重要性を低く評価しすぎていたようである」（p. 421）と述べている。

「改訂一覧」の最後の項目も最終章（p. 424）の加筆である。加筆された段落の直前の段落（p. 423）では，ナチュラリストの多くが個別創造を奉

じていると述べ，その不当性を指摘しており，この部分は初版以来，ほとんど変化していなかった。第6版で加筆した段落では,「今や状況は一変し，ほとんどのナチュラリストが偉大なる進化の原理（the greate principle of evolution）を認めている」と述べている。ダーウィンの勝利宣言である。

万物の進歩を意味するスペンサーの用語「進化」(evolution)は『種の起源』の初版から第5版まで，一度も用いられていなかったが，第6版で初めて「生物進化」を意味する用語として導入された[35)]。

第6版の重大な誤植としてフリーマン（p. 80）が指摘するのは, 第14章・第3段落の最後の文にある単語 “observed”（p. 365）である。第5版までの本文との比較から，この “observed” は “obscured” でなければならないという。フリーマンの指摘は正しいと思われるが，第6版の増刷，および第6版を底本とした諸版では “observed” のままになっている。

第6版がそれまでの版と決定的に異なることの一つが，増刷が繰り返されたことである。まず，1873年に2,000部 , 1875年に1,500部が増刷された。1876年には1,250部が刊行され，累積部数は17,500部となり，タイトルページには “Eighteenth Thousand” と記された。この1876年版では若干の字句修正がなされ，これが『種の起源』の最終テキストとなった。ただし, この字句修正は内容に影響するようなものではない。たとえば, “Cape de Verde Islands” が “Cape Verde Islands” に変更されている（pp. 337 & 354)。タイトルページには，“Sixth Edition, with Additions and Corrections to 1872.” と記されているが，加筆はなく，いささか大げさに過ぎる記載である。

1878年以降, 1876年版の増刷が繰り返された。ペッカム(p. 24)によれば，1878年，1880年，1882年に2回，1883年，1885年，および1886年にそれぞれ2,000部，1887年に3,000部，1889年と1890年にそれぞれ2,000部が増刷された。

ペッカム（p. 25）によれば, 1898 年までの『種の起源』による総利益は, マレー社が約 2,700 ポンド，ダーウィン家が約 5,400 ポンドであった。金銭的にも『種の起源』は成功した書物であった。

1870 年の教育法による読者層の拡大を見込んで廉価版を刊行したマレーの方針は大成功であった。ダーウィンにとっても主著が広く読まれることは歓迎すべきことであった。しかし，ペッカム（p. 24）がいうように，小さな文字が詰め込まれたこの廉価版の購入者の多くは，実際には読まなかった可能性が高い。

ダーウィンは 1872 年の第 6 版以降,『種の起源』の改訂を試みていない。第 6 版までの改訂の間隔を考えれば，1882 年に没するまで，2 ないし 3 回の改訂がなされてもよかったはずである。ダーウィンは『種の起源』第 6 版（1872 年 2 月）の後も,『感情の表現』（1872 年 11 月）,『食虫植物』（1875）,『植物の他家受精と自家受精』（1876）,『花の異形』（1877）,『植物の運動力』（1880），および『ミミズと土』（1881）を刊行している。ダーウィンの研究と執筆の能力は衰えていなかった。

第 6 版は鉛版印刷だったことが，改訂がなされず，もっぱら増刷が行われた理由の一つであろう。しかしそれだけではなく，ダーウィンにも改訂を行わない事情があったと思われる。前述したように，第 6 版最終章の加筆でダーウィンは勝利宣言をしている。『種の起源』の目的は完了し，同書を改訂する必要がなくなったのである。そのように考えたダーウィンは，残る人生を植物の研究に集中したのであろう。

5. おわりに

ダーウィンの『種の起源』執筆態度は三つの時期に区分できるであろう。初版（1859）と第 2 版（1860）の段階では大著の執筆にこだわり，抄録としての『種の起源』に時間を取られたくないという心情が露わであった。

しかし，第３版（1861）執筆の段階では大著の完成を諦めて『種の起源』によって自説を広めることになり，その態度が第４版（1866），および第５版（1869）へと引き継がれていった。

当時の書評を分析した研究から，第５版（1869）までに，ダーウィンの主張した共通の祖先からの枝分かれ的生物進化は広く認められていたことが明らかにされている[36)]。前述したように，ダーウィンは第６版で，「今や，ほとんどのナチュラリストが偉大なる進化の原理を認めている」と勝利宣言をしている。『種の起源』については自然選択説だけが注目されがちであるが，ダーウィンにとってはなによりも，種の変化，すなわち生物進化の事実の普及が重要な課題であった。その課題を達成した『種の起源』第６版（1872）以降，ダーウィンはその改訂に取り組むことはなかった。

廉価版の『種の起源』第６版は購入されても実際に読まれなかったと思われる。これは第６版だけの問題ではないだろう。科学の古典となった『種の起源』は現在でもさまざまな形で刊行されているが，実際に読まれることは稀である。『種の起源』は，購入されても読まれることのない図書の典型となっている。

注

1）ダーウィンの伝記については下記を参照。松永俊男『チャールズ・ダーウィンの生涯』朝日新聞出版，2009.; Janet Browne, *Charles Darwin: a biography*. v.1, *Voyaging*. Jonathan Cape, 1995. v.2, *The Power of Place*. Alfred A. Knopf, 2003. 最も詳細で正確なダーウィン伝である。

2）科学史家ヴァン・ワイ（John van Wyhe）が主宰するウェブ・サイト *Darwin Online* に，『種の起源』の初版（1859）から第６版（1872）に至る各版と最終テキストとなった第６版1876年版について，それぞれのテキスト版，イメージ版，およびPDFが掲載されている。

3）Morse Peckham（ed.），*The Origin of Species : A Variorum Text*. U of

Pennsylvania P, 1959. 同書からの引用は，“Peckham, 11” という形で表記する。

4）R.B.Freeman (ed.), *The Works of Charles Darwin, An Annotated Bibliographical Handlist*. 2nd ed., Dawson, 1977. 73-111. 同書からの引用は，“Freeman, 73” という形で表記する。

5）Frederick Burkhardt et al. (eds.), *The Correspondence of Charles Darwin,* Vol.1-28, Cambridge UP, 1985-2021. 1880 年分までを収録。同書からの引用は, “CCD7, 269”という形で表記する。この例では, 書簡集第 7 巻 269 ページを意味している。

6）Michèle Kohler & Chris Kohler, “The *Origin of Species* as a Book,” in Michael Ruse & Robert J. Richards (eds.), *The Cambridge Companion to the* “*Origin of Species*”. Cambridge UP, 2009. 333-351.

7）マレー三代の伝記資料は下記による。*Dictionary of National Biography, 1885-1900*.

8）http://www.hachette.co.uk/AboutUs/Who-We-Are

9）https://www.nls.uk/collections/john-murray

10）クロウズ二代の伝記資料は下記による。*Dictionary of National Biography, 1885-1900*.

11）https://clowes.co.uk/

12）ミューディの伝記資料は下記による。*Dictionary of National Biography, 1885-1900*.

13）ヴィクトリア朝の貸本文化については下記を参照。清水一嘉『イギリスの貸本文化』図書出版社，1994.

14）前掲 1）Browne（2003), 88-89.

15）*ibid*., 218 & 222.

16）*ibid*., 68-71.

17）『種の起源』諸版の形態データはペッカム（pp. 787-792）に基づいて記載し，*DarwinOnline* で確認した。

18）前掲 1）Browne（2003), 82.

19）前掲 6）Kohler & Kohler, 347-348.

20）Peter Shillingsburg, “The First Five English Editions of Charles Darwin’s *On the Origin of Species*.” *Variants,* 5 (2007): 221–243.

21）前掲 6）Kohler & Kohler, 334–339.

22）『種の起源』と大著のタイトルについては下記の拙著を参照。松永俊男「『種の起源』の書名について」『桃山学院大学人間文化研究』14 号（2021），333–349.

23）*Publishers Circular*, 1 Dec., 1859. 599–600. 拙著『チャールズ・ダーウィンの生涯』（p. 221）で，スマイルズ『自助論』の注文部数を「三万二〇〇〇部」としているのは，桁違いの誤りである。

24）マレーがダーウィンに送った書簡は失われているが，24 日に届いていることが当日にダーウィンがハクスリーに送った書簡（CCD7, 393）とライエル宛の書簡（CCD7, 394）で確認できる。

25）自然神学書としての『種の起源』については下記を参照。松永俊男『ダーウィンの時代－科学と宗教』名古屋大学出版会，1996.

26）『種の起源』初版訳の八杉竜一訳･岩波文庫版には両者とも本文にない。「クジラ・クマ物語」は訳注（6–26）に記されているが，「くさびの比喩」は完全に無視されている。

27）「くさびの比喩」については下記を参照。Dov Ospovat, *The Development of Darwin’s Theory : Natural History, Natural Theology, and Natural Selection, 1838–1859*. Cambridge UP, 1981. 60–73 & 270（n21）.「クジラ・クマ物語」については下記を参照。Thierry Hoquet, *Revisiting the Origin of Species : the Other Darwins*. Routledge, 2018. 24, 30, & 91–92.; Alvar Ellegård, *Darwin and the General Reader: the Reception of Darwin’s Theory of Evolution in the British Periodical Press, 1859–1872*. U of Chicago P, 1990. 238–241.

28）マレーがダーウィンに送った書簡は失われているが，22 日に届いていることとその内容が，当日にダーウィンがハクスリーに送った書簡（CCD8, 487）と 24 日付ライエル宛ダーウィンの書簡（CCD8, 491）で確認できる。

29）前掲 24 日付ライエル宛書簡。

30）1866 年 10 月 12 日付プリチャード（Charles Prichard）宛書簡（CCD14,

348-9). ウィールドの問題も含め，ダーウィンと地質年代の時間については下記を参照。Sandra Herbert, *Charles Darwin, geologist*. Cornell UP, 2005. 349-354.

31）*Publishers' Circular*, 15 Nov. 1866. 715.

32）第4版まで第4章の章題は「自然選択」(Natural Selection）であったが，第5版では「自然選択，すなわち適者生存」(Natural Selection, or the Survival of the Fittest)）となった。第4章の本文では7箇所（pp. 92, 95, 103, 105, 125, 145, 160)，その他の章では合わせて6箇所（pp. 72, 168, 226, 239, 421, 556）で「適者生存」を用いている。ダーウィンと「適者生存」については下記を参照。Diane B. Paul, "The Selection of the 'Survival of the Fittest'," *Journal of the History of Biology*, 21（1988), 411-424.

33）マイヴァートについては下記を参照。松永俊男『ダーウィン前夜の進化論争』名古屋大学出版会，2005. 188-218.

34）ペッカムでは新たな第7章の全体が第5版第4章の修正として扱われている。

35）"evolution" は第6版の第7章（p. 201）で2回，第15章（p. 424）で3回，用いられている。

36）前掲27）Ellegård（1990）

The *Origin of Species* as a Book

MATSUNAGA Toshio

In 1859, Charles Darwin published *Origin of Species* as the abstract of the Big Species Book. He published revised editions of the *Origin* five times, 2nd ed. (1860), 3rd ed. (1861), 4th ed. (1866), 5th ed. (1869), and 6th ed. (1872). In this paper, differences of formats over the six editions are described, and alterations of Darwin's attitude toward writing and revising the *Origin* are investigated by analysing the correspondence of Darwin with John Murray, Charles Lyell, Thomas Henry Huxley and others.

In writing the 1st ed. and the 2nd ed., Darwin wanted to complete the Big Book. He showed unwillingness to devote time to writing the *Origin*. But at the stage of the 3rd ed., he gave up the idea of completing the Big Book and decided to expand upon his theory of the biological evolution through the *Origin*.

After ten years from the 1st ed., Darwin's idea of the branching evolution from a common ancestor had been widely acknowledged. In the concluding chapter of the 6th ed., Darwin states, "Now things are wholly changed, and almost every naturalist admits the great principle of evolution." (p. 424). This is Darwin's declaration of victory. The most important object of the *Origin* had been accomplished. After the 6th ed., therefore, Darwin did not try to revise the *Origin*, and concentrated his energy on studying botany.

The 6th ed. was published as a cheap edition. The appearance of the 6th ed. was markedly different from the previous editions. The format from the 1st ed. to 4th ed. was post octavo. The 5th ed. was crown octa-

vo. The 6th ed. was shorter and narrower than the 5th ed. The types of the text in the previous editions were 10-point, but 8-point in the 6th ed. In the previous editions, texts were 35 lines in a page, but 45 lines in the 6th ed. The previous editions are regarded as fair specimens of Victorian typography. But the 6th ed. is difficult to read.

From the 1st ed. to 4th ed., the price of the *Origin* was 14s. The 5th ed. was 15s. The 6th ed. was half of the 5th ed., i.e., 7s6d. The previous editions were type printing and were never reprinted. The 6th ed. was stereotype printing and was reprinted almost annually.

After the Education Act of 1870, the readership of England was enlarged. Murray's objective in publishing the cheap edition was for the new readership. The 6th ed. sold well, but it is probable that many people were kept from reading the book by its unattractive appearance.

Now the *Origin* has become a classical book of science and has been published in various forms in various languages. However, it is rare that the book is read thoroughly. The *Origin* is the typical book that is bought but not read.